「狼よ落日を切れ」は私が初めで見た日本の時代劇風の映画で、今までマンガ、小説やアニメなどのサブカルチャーから日本歴史について受けた断片的な知識と比較できる良い機会だった。でも、映画を見る間、よく分かったことはアニメで聞いた新選組や将軍にあたる単語だけ。やはり、日本の文化、歴史、伝統、それと日本人の情緒に精通しながら、こんな風の映画の内容を完璧に理解することは孤軍奮闘だったし、言語だけではなく文化の勉強の必要さをもう一度痛感した。

「狼よ落日を切れ」を見て。。。

　最初には、日本人が最も尊敬する二人の一人である「坂本龍馬」の物語だと思って、期待したが、彼の登場はなかったことが残念。でも、主人公の「杉虎之助」の活躍やあの時の武士から見られない行動の決断力などが深い印象を残った。時々、時代劇の非現実的なストーリーやキャラクターの設定は、時代劇にあまり慣れていない私の眉を顰めた。もちろん、この作品が四十年前に撮ったことを勘案して映画を鑑賞すると、素晴らしいものなのは疑う余地がないだろう。

　最も、感銘を呼び起った場面は、杉虎之が時代の流れに乗って、自分の武士のアイデンティティーを捨てた後、新しい生き方を探ったことだと思う。もし、私が同じ立場だったら、できるかと自分に聞くと、やはり無理だろうね。ただ、杉虎之の行実の中で、二十人以上の薩摩の士を殺して礼子の仇を取った彼が、十年近く自分を育てた師匠を殺した半次郎を許したことは少し疑問になった。

　私は十年以上前から韓国のドラマと映画を見ない。もし、辛辣な批判が許されたら、これの一番大きな理由は私が持つ短い経験から出た韓国の認識のせいだと信じている。韓流ドラマと映画は、とこまでも、視聴者の感情移入のために、似ているテーマで書いている。

時代劇も含めて、最底辺から始めることや高貴な家の生まれより、成功するストーリーが多いが、「狼よ落日を切れ」の場合、胎生にかかわらず、結局全ての人は時代に巻き込まれて、いきために変化を受け入れることを見て、かなり楽しみにした。